九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

成人における愛着スタイルと愛着行動の状況間一貫性

中尾, 達馬
九州大学大学院人間環境学研究院

加藤, 和生
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/15677

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.9-20, 2005-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Kyushu University Psychological Research
2005, Vol.6, 9-20

成人における愛着スタイルと愛着行動の状況間一貫性[1)]

中尾　達馬[2)]　九州大学大学院人間環境学研究院
加藤　和生　九州大学大学院人間環境学研究院

Adult attachment styles and consistency of attachment behaviors across situations

Tatsuma Nakao (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)
Kazuo Kato (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study was twofold: (1)To investigate to what extent adults when placed in attachment situations (those that arouse negative affects and, therefore, likely activate their attachment behavioral system) would use attachment behavior strategies (ABS, those of coping with negative affects through interactions with others), compared with self-resolving coping strategies (SRCS, those of coping without recourse to others), and (2)to verify situational consistency of attachment behaviors for 4 attachment styles. In Study 1, we asked 324 college students to describe their coping behaviors in the daily situations that had evoked negative affects, and qualitatively analyzed what coping strategies (ABS vs. SRCS) they used more frequently in such attachment situations. In Study 2, we examined situational consistency of attachment behaviors across 12 attachment situations for 4 attachment styles, which was theoretically assumed but never tested, in addition to quantitatively replicating the findings of Study 1. The main findings of two studies were as follows: (1)Adults used ABS to the same or less extent than SRCS. (2)Although Fearful were revealed to possess ABS in their repertoire of coping strategies, they were less likely to use them, compared with other attachment styles. (3)In general, Secure and Preoccupied used ABS more frequently than Dismissing and Fearful, those differences among styles being more pronounced in the situations of "damages to close relationships" and "strange situations." Those findings can be interpreted to demonstrate situational consistency of attachment behaviors in adults.

Keywords: Adult attachment behavior patterns, adult attachment styles, situational consistency, coping strategies, Japanese college students

愛着行動とは，ネガティブ感情喚起場面において（特に愛着場面[3)]で），主観的安全感（security）を得るために[4)]，他者とかかわろうとする行動である（e.g.，中尾・加藤，2001）。そしてBowlby（1969）は，発達過程で現れる愛着行動には一貫したパターンがあると仮定し，この愛着行動パターンを様々な発達（e.g.，情動制御，対人関係スキル）を支える基盤となるパーソナリティ特性として捉えている。

これを受けて成人愛着研究では，「成人の愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを反映する」ということを暗黙に前提している（e.g., Hazan & Shaver, 1987）。そして，この暗黙の前提は，成人の愛着スタイルにより，いろいろな場面を通して愛着行動のパターンに一貫性が存在することを仮定するものである（状況間一貫性）。

成人においても愛着スタイルによる愛着行動の状況間一貫性はあるのか：暗黙の前提の検証1

だが，愛着スタイルによる愛着行動パターンの違いに状況間一貫性があるかどうかは未だに不明瞭なままである。というのは，成人の愛着行動研究は著者らの知る限り５つしかない（Brennan & Shaver, 1995; Collins &

[1)]本研究の一部は，九州心理学会第61回大会（九州大学），日本心理学会第66回大会（広島大学）で発表を行いました。
[2)]本研究を行うにあたりご指導下さいました九州大学丸野俊一先生，京都大学遠藤利彦先生に心より感謝申し上げます。また，本研究を行うにあたりいろいろとご協力・アドバイスをして頂きました笠原正洋先生，假屋園昭彦先生，藤田豊先生，藤田敦先生，研究室の皆様方に心より感謝申し上げます。最後に，調査にご協力下さいました被験者の皆様方ご協力ありがとうございました。この論文への問い合わせ先は以下の通り：
nakaoedu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp
[3)]本研究では，ネガティブ感情喚起場面の中でも特に愛着行動が活性化されやすい場面を愛着場面と呼ぶことにする。この愛着場面は，“身体的ダメージ”，“自己へのダメージ”，“親しい人との関係へのダメージ”，“脅威事態”，“新奇場面”の４つのカテゴリーに分類される（中尾・加藤，2001）。なお本研究では，愛着人物ではなく「自己」の心が傷つく場面であることを明確にするために，中尾・加藤（2001）の“心理的ダメージ”を“自己へのダメージ”へと表記し直した。
[4)]主観的安全感を感じる（felt security）上で，キーとなるものは，愛着対象の近接性（proximity）と利用可能性（availability）である（e.g., Davila & Sargent, 2003）。

Feeney, 2000; Fraley, Davis, & Shaver, 1998; Fraley & Shaver, 1998; 中尾・加藤, 2004a)。そして，これらの研究には次の限界がある。すなわち，質問紙法を用いた研究では，場面が特定されていない（Brennan & Shaver, 1995; Fraley et al., 1998; 中尾・加藤, 2004a)。逆に，観察法による研究では，非常に限定された場面での愛着行動パターンしか検討していない（Fraley & Shaver, 1998; Collins & Feeney, 2000)。そのため，これらの研究では，上述した愛着スタイルによる愛着行動の状況間一貫性を十分に実証したとは言えないだろう。

そこで本研究の第1の目的は，愛着スタイルによる愛着行動の状況間一貫性を詳細に検証することである。すなわち，個々の特定場面で現れる愛着スタイルによる愛着行動パターンの違いを，複数の場面間で比較することを通して，この違いが「場面にかかわらず」一貫しているかどうかを検討する。具体的には，上記の5つの成人愛着行動研究から，「安定型（Secure）やとらわれ型（Preoccupied）は，拒絶型（Dismissing）や恐れ型（Fearful）に比べて，愛着行動を行う」ということが見出されている。そこで本研究では，このパターンが，場面にかかわらず一貫して見出されるかどうかを検討する。

成人にとって愛着行動はネガティブ感情を解消する上でどういう意味があるのか：暗黙の前提の検証2

冒頭のBowlbyの前提には，暗黙の前提がもう1つあると考えられる。それは，成人になっても，人は愛着場面に遭遇すると愛着行動を行うことで，喚起されたネガティブ感情を解消するだろうというものだ（それ故に，愛着場面での他者とのかかわりを愛着行動と呼ぶ)。だが果たして，このことは，成人においてどの程度成り立つことなのであろうか。というのは，幼児の場合では，自己解消方略（人との関わりを通さずに，自分一人で解消する方略）を行うことが未だ困難なため，愛着場面でのネガティブ感情への対処方略は愛着行動方略に限定されざるをえない。ところが，成人の場合は，発達過程を通して様々なコーピング方略を既に持っているため，愛着行動方略にそれほど頼る必要はなくなる。言い換えると，愛着行動方略は，成人にとっては多様なコーピング方略の一部に過ぎない（e.g., Skinner , Edge, Altman, & Sherwood, 2003)。そのため成人は，愛着場面に遭遇した場合，必ずしも他者とかかわることを通してネガティブ感情を解消する（愛着行動方略を行う）のではなく，自分一人でそれを解消するという他の方略（自己解消方略）を行う可能性が非常に高い。であるとするならば，成人の場合，愛着場面で必ずしも愛着行動が生起しない可能性もあるということになる。

成人における愛着行動の機能あるいはその発達的変化を理解するためには，ネガティブ感情の解消において，愛着行動が自己解消方略に比べて，どの程度利用されているのかを明らかにしておく必要があろう。これにより，Bowlby(1969)の「生涯を通して愛着行動は見られる」という主張の真の意味を理解することができるであろう。だが，これまでに愛着行動を扱った研究で，この問題を取り上げ，検討したものは存在しない。

以上のことを整理すると，本研究の目的は以下の2つとなる。すなわち，(1)成人は愛着場面において，コーピング方略として愛着行動方略をどの程度行うのかを検討する。その上で，(2)愛着スタイルごとの愛着行動パターンの違いが場面にかかわらず一貫しているかどうかを明らかにする。

研 究 1

研究1の目的は次の2つである。すなわち，第1の目的は，自由記述により日常の中で実際に起こるネガティブ感情喚起場面の事例を幅広く収集し，研究2で複数の愛着場面を設定するための材料を得ることである。第2の目的は，愛着場面の事例において，成人がどの程度愛着行動方略を行うのかを探索的かつ質的に検討することである。

成人は愛着場面でどの程度愛着行動方略を行うのか

成人は幼児に比べると愛着行動が顕在化しにくい(e.g., 行われにくい）と指摘されている（e.g., Weiss, 1982)。だが，このことは逆に，成人は発達過程を通して（e.g., 観察学習)，「潜在的には」愛着行動方略をコーピング方略のレパートリーとして持っている可能性があることを示している。つまり，成人は，愛着行動方略をコーピング方略のレパートリーとして持っているが，成人であるが故に（e.g., 気兼ね，遠慮，自己防衛)，実際には愛着場面で愛着行動方略を行わない可能性がある。実際，拒絶型や恐れ型では，特にその傾向が強い可能性が高い。

成人における愛着行動の潜在性をより明確にするためには，(1)成人が愛着行動方略をコーピング方略のレパートリーとして持っているかどうかということと(2)実際に愛着行動方略が行われやすいかどうかを分けて分析する必要があるだろう。そこで本研究では，操作的に，レパートリー反応と初発反応の2つの指標を区別する。レパートリー反応というのは，全反応の中に1度以上愛着行動方略が含まれている場合とする。これは，（最も行われるかどうかは不明であるが）個人が行うコーピング方略のレパートリーの中に少なくとも愛着行動方略が含まれる可能性が高いことを示す指標と考えられる。それに対して，初発反応は，愛着場面に遭遇した場合に，一番はじめのコーピング方略として愛着行動方略を挙げた

場合とする。これは，愛着行動方略が一番活性化されやすい状態にある（最も行われやすい）可能性が高いことを示す指標と考えられる。

上述したように，成人は幼児に比べると愛着行動が顕在化しにくいと言われている（e.g., Weiss, 1982）。だが，もしBowlby（1969）が主張するように「人は永続的に愛着行動を行う」のであれば，次の予測を行うことができる。

予測１：レパートリー反応として愛着行動方略を持つ者は，初発反応で愛着行動方略を挙げる者に比べて多いであろう。

成人は，愛着行動方略と自己解消方略のどちらをより多く行うのだろうか。この問いについては，理論にもとづき明確な予測を行うが困難であった。実際，Weiss（1982）は愛着行動方略と自己解消方略を比較して，愛着行動が顕在化しにくいと論じているわけではない。そこで，この問いについては，レパートリー反応と初発反応において，探索的に検討を行う。

成人は潜在的には愛着行動方略をコーピング方略のレパートリーとして持っている可能性が高い。だが，前述の５つの成人愛着行動研究からは，拒絶型や恐れ型は，安定型やとらわれ型に比べて，実際には愛着行動方略を行わない可能性があることが示唆されている。したがって，これらのことにもとづくならば，次の２つの予測を行うことができる。

予測２：レパートリー反応では，愛着スタイルにかかわらず，愛着行動方略をコーピング方略として持っている。

予測３：だが初発反応では，安定型やとらわれ型は，拒絶型や恐れ型に比べて，相対的に愛着行動方略をより多く報告するという愛着スタイルによる違いが見られる。

方　法

被験者　被験者は大学生490名であり，ネガティブ感情を体験していない被験者や不完全な回答を除いた結果，分析の対象となったのは324名（平均年齢19.2歳，range=18－24，男138名，女184名）であった[5]。

質問紙　質問紙は，フェイスシート（i.e.，学部・学年・年齢・性別），愛着スタイル尺度，自由記述式対処法質問紙から構成された。

愛着スタイル尺度　愛着スタイル尺度としては，“関係尺度（Relationship Questionnaire, Bartholomew & Horowitz, 1991，以下RQと略す）”の日本語版（加藤，1999）を用いた。RQは，一般他者についての４分類愛着スタイルを測定するための強制選択式尺度であり，その信頼性や妥当性は，加藤（1999）や中尾・加藤（2004b）で既に確認されている。

回答に際し，被験者は４つの愛着スタイルの特徴が記述してある文章を読み，それぞれについて自分にどのくらいよく当てはまるかを７件法で評定した。次に，その４つの中から最もよく当てはまる愛着スタイルを１つ選択した。RQでは，この最後に１つ強制選択させたものを，その個人の愛着スタイルとみなす[6]。

自由記述式対処方略質問紙　自由記述式対処方略質問紙は，日常の様々なネガティブ感情喚起場面での対処方略を幅広く収集するための質問紙である。この質問紙は，中尾・加藤（2001）の愛着行動の自由記述式質問紙にもとづき作成された。なお，具体的な教示と質問項目は以下の通りである。

教示：過去一ヶ月の間に，「不安・悲しみ・落ち込み・恐れのような感情」を体験した出来事を思い出してください。人はそういう感情を体験したとき，どうにかしたいと思い，いろいろなことをしてこれらに対処しようとします。４種類の質問が以下にあります。それを読んでから，最も印象に残っている出来事について質問に答えてください（どんなささいなことでもかまいません）。

質問項目：

(1)どんな出来事でしたか。
(2)その時，どんな気持ちや感情を体験しましたか。
(3)そういうときあなたは「たいてい」どうしますか（たくさん挙げてください）。
(4)(3)のようにしたいのはなぜですか。（それぞれについて書いてください）。

結果と考察

愛着場面の具体的内容　中尾・加藤（2001, p.101）の愛着場面の場面カテゴリーへの分類基準に従い，第１著者が一人で場面の分類を行った[7](Table 1)。その結果，それぞれの場面カテゴリーの事例数は，“身体的ダメージ”が12，“自己へのダメージ”が66，“親しい人との関係へのダメージ”が97，“脅威事態”が20，“新奇場面”

[5]被験者数の減少が大きいのは，「過去一ヶ月」という短期間におけるネガティブ感情喚起場面の経験を尋ねたためであると考えられる。

[6]全被験者における愛着スタイルの割合と分析の対象となった被験者における愛着スタイルの割合には大きな偏りは見られなかった。なお，本研究における全被験者の愛着スタイルの割合は，安定型が22.7%（101名），拒絶型が5.7%（28名），とらわれ型が43.1%（211名），恐れ型が19.6%（96名）であった。

[7]中尾・加藤（2001）の123事例に加えて再度場面について質的分析を行うのは，(1)中尾・加藤（2001）の被験者が女性だけであったこと，また，(2)４分類愛着スタイルの割合には大きな偏りがあるため（e.g.,加藤，1999），これら４分類全てから事例を収集するためには事例数を増加する必要があったからである。

Table 1
愛着場面の場面カテゴリーごとの具体的内容とその頻度[a) b)]

カテゴリー	内容
a. 身体的ダメージ(12)	体調不良 (4), ケガ (4), 忙しい (3) 後遺症 (1)
b. 自己へのダメージ (66)	何かが思い通りにいかない (e.g., 授業のノルマを達成できない) (21), 何らかの失敗経験 (e.g., アルバイト先で失敗をする) (18), 誰かに怒られた (12), 親しい人から傷つくことを言われた (6), 特定の出来事はないが, 今の自分に漠然としたとまどいを感じる (6), 面接や審査に落ちた (3)
c. 親しい人との関係へのダメージ (97)	失恋 (29), 親しい人と離ればなれ (ホームシックを含む) (12), 親しい人 (e.g., 恋人) とのけんか (10), 冷たい態度をとられた (8), 親族の病気やケガ (7), 人間関係が何となくギクシャクしていると感じる (7), 親しい人の死 (6), 対人関係に対する漠然とした不安 (5), 相手にイヤなことをされる (5), 裏切りにあった (3), その他 (5, ただし不和の原因は自身にある)
d. 脅威事態(20)	帰宅途中や家で何か怖い目に遭う (e.g., 夜の帰り道) (6), 怖い夢や映画 (5), 事故場面に遭遇(4), からまれた (3), 災害 (2)
e. 新奇場面 (41)	何か (e.g., 教育実習, バイトの面接) に挑戦 (29), 将来への不安 (7), 生活環境の変化 (e.g., 一人暮らしをはじめる) (5)
f. その他 (76)	所有物の喪失・破損 (13), 試験・レポートが難しい (7), 授業への遅刻・欠席 (6), 他者のせいで何らかの不利益を被った (6), ペットとの死別・離別 (4), 応援するスポーツチームの敗戦 (3), など

a) ( )内の数字は, 出現頻度である。
b) 2つのカテゴリーにまたがっている可能性がある事例は次の2つである。1つは, "自己へのダメージ"の「親しい人から傷つくことを言われた」である ("親しい人との関係へのダメージ"と重複しているが,「自己が傷ついた」ことを重視しこのカテゴリーに分類した)。もう1つは, "親しい人との関係へのダメージ"の「親しい人と離ればなれ (e.g., ホームシック)」である ("新奇場面"と重複しているが,「親しい人と離れたこと」を重視しこのカテゴリーに分類した)。

が41, "その他"が76であった。なお, 愛着場面かどうかの判断が困難な事例は12 (e.g., 自分が留年したことを親に告げたこと) であった (以下の分析ではこの12事例を除外した)。

"親しい人との関係へのダメージ"や"新奇場面"の事例数は予想した以上に多かったと言えるが, 愛着場面の出現頻度の順は, 中尾・加藤 (2001) と一致していた。このことにより, 中尾・加藤 (2001) が呈示した愛着場面を分類する枠組みは, 有用であることが確認されたと言えよう。

愛着行動方略と自己解消方略の比較 上記の分析で選択された236事例 (全体の72.8%) について, そこでのコーピング方略が愛着行動方略なのかあるいは自己解消方略なのかを第1著者が一人で分類した。この判定基準としては, 中尾・加藤 (2001, p. 101) の判定基準を用いた。なお, 人とのかかわりであるが愛着行動方略ではない事例が23あった (例えば, 人と話すという行動でも理由が情報収集である場合)。そこで以下では, これらを除外し, 計213事例 (全体の65.7%) について分析を行う。

レパートリー反応についての分析は, 成人が愛着行動方略をコーピング方略の一部として持っているかどうかについて検討することを目的として行う。そこでこの分析では, 全反応の中に1度以上愛着行動方略が含まれている被験者を「愛着行動方略型」とし, 1度も愛着行動方略が含まれない被験者のみを「自己解消方略型」とした[8)]。

初発反応についての分析は, 愛着行動方略が一番活性

8) レパートリー反応で, 愛着行動方略だけをコーピング方略として挙げた被験者は35名であった (i.e., 安定型=12名, 拒絶型=3名, とらわれ型=15名, 恐れ型=5名)。

Table 2
レパートリー反応での5つの場面カテゴリーごとの愛着行動方略型と自己解消方略型の比較
（数字は出現頻度）[a)]

	方略型	親密な関係	自己	新奇場面	脅威事態	身体的	合計
安定型	愛着行動	**16**	5	1	1	1	**24**
(*N*=46)	自己解消	**7**	7	8	0	0	**22**
拒絶型	愛着行動	**3**	0	0	0	1	**4**
(*N*=11)	自己解消	**0**	5	0	2	0	**7**
とらわれ型	愛着行動	**32**	10	6	4	2	**54**
(*N*=108)	自己解消	**12**	19	15	5	3	**54**
恐れ型	愛着行動	**14**	5	3	0	0	**22**
(*N*=48)	自己解消	**7**	8	3	5	3	**26**
合計		**91**	59	36	17	10	**213**

a) 身体的＝身体的ダメージ，自己＝“自己へのダメージ”，親密な関係＝“親しい人との関係へのダメージ”である。また，これらの表記は，他の図表も同様である。

化されやすい状態にあるかどうかについて検討することを目的として行う。そこでこの分析では，一番はじめのコーピング方略として愛着行動方略を挙げたかどうかについて検討した。

予測1の分析　予測1を検討するために，レパートリー反応における「愛着行動方略型」の割合と初発反応において愛着行動方略を挙げた者の割合を算出した[9)]。その結果，レパートリー反応での「愛着行動方略型」の割合は全体の48.8%であった。それに対して，初発反応で愛着行動方略を挙げた者の割合は，全体の32.9%であった。さらに，レパートリー反応で愛着行動方略と自己解消方略の両者を挙げた「愛着行動方略型」69名のうち50.7%は，初発反応では自己解消方略を挙げていた。

したがって，予測1はほぼ支持されたと言える。すなわち，成人は潜在的には愛着行動方略をコーピング方略のレパートリーとして持っているが，実際には愛着行動方略を行いにくいことが示唆された。

さらに，これらの結果にもとづくならば，愛着行動方略と自己解消方略のどちらがより行われやすいのかについては，次のことが示唆されたと言えよう。すなわち，成人は，幼児と異なり，愛着場面において，約半数以下の者しか愛着行動方略を行わない可能性があることが示唆された。

加えて，今までに指摘されてきた成人における愛着行動の顕在化のしにくさ（e.g., Weiss, 1982）の原因の1つとして，次のことを想定することができよう。つまり，成人は自己解消方略を行うことが可能である（愛着行動を行わなくても自分一人である程度ネガティブ感情を低減できる）からこそ，愛着行動が顕在化しにくいということが考えられる。

予測2の分析　予測2を検討するために，レパートリー反応について，場面を統合して，愛着スタイルごとに「愛着行動方略型」と「自己解消方略型」の頻度を比較した（Table 2の合計部分）。その結果，安定型では52.2%，拒絶型では36.4%，とらわれ型では50.0%，恐れ型では45.8%が「愛着行動方略型」であった。したがって，予測2はほぼ支持された。つまり，愛着場面でのコーピング方略として愛着行動方略を持っているかどうかは愛着スタイルによらずほぼ同じくらいである可能性が示唆された。

さらに，個々の場面カテゴリーについて同様の検討を行った（Table 2）。その結果，“親しい人との関係へのダメージ”では，同様の傾向が確認されかつ「愛着行動方略型」の頻度が「自己解消方略型」の頻度に比べて多かった（Table 2左側）。すなわち，安定型の69.6%，拒絶型の100%（ただし，*N*=3），とらわれ型の72.7%，恐れ型の66.7%が「愛着行動方略型」であった。

したがって，“親しい人との関係へのダメージ”では，成人は，愛着スタイルにかかわらず，愛着行動を行おうとすれば行うことが可能であるかもしれない。言い換えると，“親しい人との関係へのダメージ”は，愛着行動が活性化される可能性が非常に高い状況であると言える。そのため，“親しい人との関係のダメージ”に特化して研究を展開するならば（e.g., Feeney, 1998），それ以外の愛着場面に比べて，愛着行動の頻度が高いため，これを捉えることがより容易となるかもしれない。

予測3の分析　次に予測3を検討するために，初発反応について，場面を統合して，愛着スタイルごとに愛着行動方略と自己解消方略の出現頻度を比較した（Table

9) これらの計算は，Table 2と3の合計部分や脚注8にもとづき行った。

Table 3
初発反応での5つの場面カテゴリーごとの愛着行動方略と自己解消方略の比較（数字は出現頻度）

	方略型	親密な関係	自己	新奇場面	脅威事態	身体的	合計
安定型	愛着行動	**13**	2	1	1	1	**18**
(*N*=46)	自己解消	**10**	10	8	0	0	**28**
拒絶型	愛着行動	**3**	0	0	0	1	**4**
(*N*=11)	自己解消	**0**	5	0	2	0	**7**
とらわれ型	愛着行動	**24**	7	2	3	0	**36**
(*N*=108)	自己解消	**20**	22	19	6	5	**72**
恐れ型	愛着行動	**6**	4	2	0	0	**12**
(*N*=48)	自己解消	**15**	9	4	5	3	**36**
合計		**91**	59	36	17	10	**213**

3の合計部分)。その結果，愛着行動方略を挙げた者の割合は，安定型では39.1%，拒絶型では36.4%，とらわれ型では33.3%，恐れ型では25.0%であった。このことから，予測3は部分的に支持された。すなわち，概して，安定型やとらわれ型は，恐れ型に比べて愛着行動方略を行いやすい可能性があることが示唆された。

さらに，個々の場面カテゴリーについて同様の検討を行った。その結果，“親しい人との関係へのダメージ”では，より明確な愛着スタイルの違いがあった（Table 3左側)。すなわち，愛着行動方略を挙げた者の割合は，安定型の56.5%，拒絶型の100%（ただし，*N*=3），とらわれ型の54.5%，恐れ型の28.6%であった。

以上のことを整理すると，研究1からは以下の4点が示唆された。すなわち，(1)成人は，幼児と異なり，愛着場面において，約半数以下の者しか愛着行動方略を行わない可能性がある。(2)恐れ型は，安定型やとらわれ型と同様に，概して，愛着場面におけるコーピング方略の一部として愛着行動方略を持っている。(3)だが，実際には，恐れ型は，安定型やとらわれ型に比べて，愛着行動方略を行わない可能性が高い。(4)“親しい人との関係へのダメージ”では，他の愛着場面に比べて，より愛着行動方略が行われる。

研究1では，複数の愛着場面設定のための材料を得ることができ（Table 1），さらに質的分析を通して成人の愛着行動の潜在性についての知見を得ることができた(Table 2，3)。そこで研究2では，これらを踏まえた上で，数量的に，(1)成人での愛着行動方略と自己解消方略の比較を行い，(2)愛着スタイルごとの愛着行動パターンの違いが場面にかかわらず一貫しているのかの検討を行う。

研 究 2

研究2では，Table 1や中尾・加藤（2001）の結果にもとづき日常生活で経験する可能性が高い愛着場面を設定する。そして，それらの場面で(1)愛着行動方略がどの程度行われるのかについて，研究1の知見を数量的に確認する。さらに，(2)愛着スタイルによる愛着行動方略，自己解消方略のパターンの状況間一貫性について数量的に検討する。

研究2では，研究1の結果（Table 2，3）を踏まえ，次の2つの予測を立てた。

予測1：研究1と同様に，愛着スタイルごとに愛着行動方略と自己解消方略の頻度を比較した場合に，場面や愛着スタイルによらず，愛着行動方略は自己解消方略より行われることが少ないと予測される。

予測2：5つの成人愛着行動研究の結果にもとづくならば，愛着場面全般において，概して，安定型やとらわれ型は，拒絶型や恐れ型に比べて，愛着行動方略を行うと予測される。その際，研究1の結果を踏まえるならば，特に“親しい人との関係へのダメージ”では，その違いがより明確になると予測される。

方 法

被験者 被験者は大学生378名（平均年齢18.9歳，range＝18－25，男104名，女269名）であった。

質問紙 質問紙は，フェイスシート（i.e.，学部，学年，年齢，性別，恋人の有無)，愛着スタイル尺度（RQ)，12場面対処方略質問紙から構成された。

愛着スタイル尺度 研究2で用いた愛着スタイル尺度のRQは，研究1で用いたものと同じである。なお，愛着スタイルの割合は，安定型25.9%（96名)，拒絶型5.1%（19名)，とらわれ型47.7%（177名)，恐れ型21.3%（79名）であった。

12場面対処方略質問紙 この質問紙は，12のネガティ

Table 4
研究2で用いる愛着場面[a)]

	設定された場面
a. 身体的ダメージ	1. 自分が病気やケガをしたとき 2. 自分が忙しくて疲労がたまったとき
b. 自己へのダメージ	3. 自分の能力の不足を感じたとき（例：授業，テスト，サークル，バイト，など） 4. 親しい人（例：親，友人，恋人，など）が自分に対してきついことや傷つくことを言ったとき(例：バカじゃない，など)
c. 親しい人との関係へのダメージ	5. 親しい人（例：親，友人，恋人，など）とケンカをしたとき 6. 親しい人（例：親，友人，恋人，など）に冷たい態度をとられたとき 7. 自分が失恋したとき 8. 親しい人（例：親，友人，恋人，など）と離ればなれになったとき
d. 脅威事態	9. 天変地異が起こったとき（例：台風・大雨・雷，など） 10. 怖い夢・映画を見たとき
e. 新奇場面	11. これから先のことを考えたとき（例：進路，など） 12. 今までと生活環境が変わったとき（例：一人暮らし，進学，など）

a) 7と8は，“親しい人との関係のダメージ”の中でも特に対象喪失（loss）との関連が強い場面として設定した。また，3は“傷つく”ということを重視し“自己へのダメージ”としたが，対人場面ということを強調するならば，“親しい人との関係へのダメージ”に分類することも可能である。

ブ感情喚起場面において，そこで実際に行われた愛着行動や自己解消方略の頻度，その時に体験したネガティブ感情の程度を測定するための質問紙である。なお，12場面（Table 4）は，Table 1と中尾・加藤（2001）の事例にもとづき選定した。

それぞれの場面におけるネガティブ感情の強さの検討は，操作チェックとして行う。というのは，成人の愛着行動は，ネガティブ感情を体験する状況で行われる行動だからである。

教示では，「高校入学より後のできるだけ最近のことを思い浮かべながら」各場面について以下の3つの質問を7件法で評定させた（以下のaでは，1＝“全く感じなかった”から7＝“非常に強く感じた”，bとcでは，1＝“全くしなかった”から7＝“非常によくした”）。なお，これらの場面に全く遭遇したことがない場合には，ネガティブ感情の7段階評定尺度の隣に“8：なし”を設定し，これを選択するよう教示した。

(a)マイナスの感情をどのくらい強く感じましたか。
(b)そういうマイナスの感情を持ったとき，その感情を解消するために，人とかかわろうとしたことがどのくらいよく（頻繁に）ありましたか（例：相談する，グチをこぼす，直接会って話をする，など）[10)]。
(c)あるいは，人とかかわりをもつのではなく，自分1人の力でマイナスの感情を解消しようとしたことがどのくらいよく（頻繁に）ありましたか（例：音楽を聞く，テレビを見る，寝る，日記をかく，自分で自分をはげます，など）。

結果と考察

操作チェック　12の愛着場面でどのくらいネガティブ感情を体験するのかを検討した（Fig.1）。その結果，「9.天変地異」では値が若干低いが，概して，研究2で設定した愛着場面では，被験者はネガティブ感情を体験していることが確認されたと言えよう[11)]。

愛着行動方略と自己解消方略の比較　予測1を検討するために，4分類愛着スタイルのそれぞれについて，12場面での愛着行動方略と自己解消方略の比較を行った（Fig.2）。その結果，予測1はほぼ支持された。すなわち，概して，愛着スタイルや場面によらず，愛着行動方

10) Table 4における「1.病気・ケガ」では医者や看護師以外の人とのかかわり，「9.天変地異」では，警察・消防署以外の人とのかかわりを愛着行動方略とした。また，“親しい人との関係へのダメージ”の4場面では，ネガティブ感情を喚起した相手以外の人とのかかわりを愛着行動方略とした（e.g.，失恋した相手以外）。

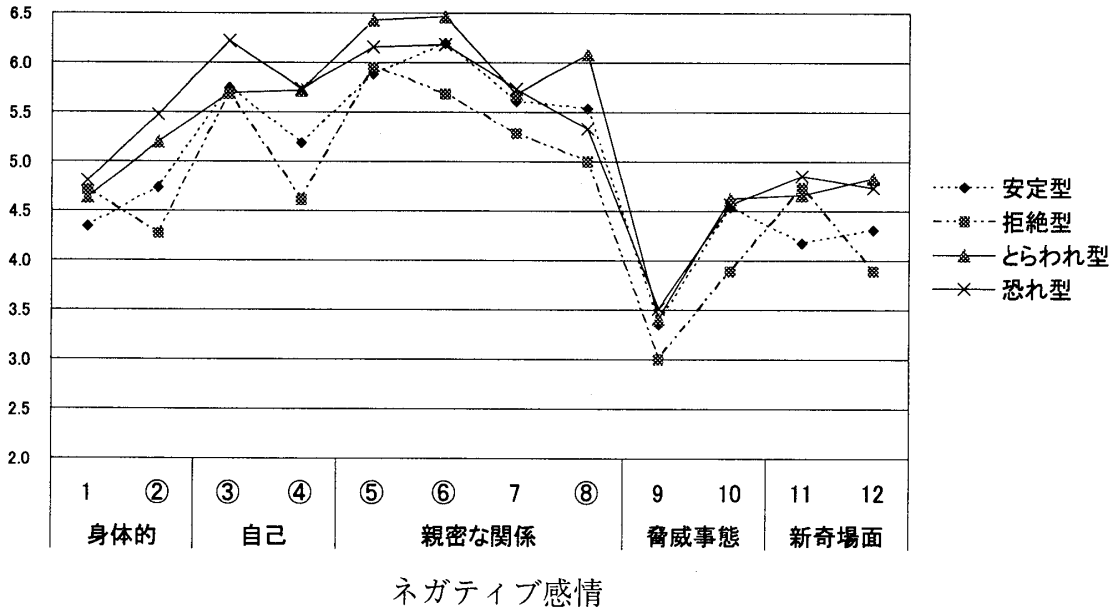

Fig.1 ネガティブ感情における4分類愛着スタイル間の比較[a)]

[a)] 横軸の数字は，Table 4 の場面番号に対応している。また，横軸（場面）は連続量でないが，プロフィールを示すため，便宜的に折れ線グラフを用いた。これらのことは，Fig. 2 と 3 も同様である。場面の番号の○は，その場面において，UNIANOVAが有意でありかつ多重比較（Tukey の *HSD* 検定）の結果，愛着スタイルごとに違いがあったことを示す（これらの詳細な結果については，Table 5 参照のこと）。

略は自己解消方略と同程度あるいはそれ以下の頻度で行われる傾向が見られた。

探索的に，愛着スタイルごとに，それぞれの場面において，愛着行動方略と自己解消方略のどちらがより行われるのかについて *t* 検定を行った（Fig.2）。その結果，「2. 疲労」，「3. 能力不足」では，全ての愛着スタイルにおいて，自己解消方略の方が愛着行動方略に比べてより行われていた。さらに，拒絶型や恐れ型は，「5. 親しい人とのケンカ」，「6. 親しい人から冷たい態度をとられた」，「11. これから先のことを考える」でも，自己解消方略を愛着行動方略に比べてより行っていた。だが，安定型やとらわれ型は，「9. 天変地異」，「10. 怖い夢・映画」，「12. 生活環境の変化」では，自己解消方略よりもむしろ愛着行動方略をより行っていた。

また，ネガティブ感情を体験する程度と愛着行動方略の頻度の場面間でのパターン（Fig.2）は，愛着スタイルによらず一貫して類似していた。つまり，ネガティブ感情を体験するほど，成人は愛着行動を行いやすいということが示唆された。さらに，このことは従来の知見（e.g., Collins & Feeney, 2000）と一致しており，成人の愛着行動が活性化されやすい状況を設定する際には，操作チェックの1つとして「ネガティブ感情を体験する程度」が重要であることが示されたと考えられる。

愛着スタイルと愛着行動パターンの状況間一貫性 予測2を検討するために，12場面で現れた愛着行動パターンを愛着スタイル間で比較した。その結果，予測2はほぼ支持された。すなわち，Fig.3 左側から分かるように，まず全般的に見ると，安定型やとらわれ型は，拒絶型や恐れ型に比べて，愛着行動方略を行う傾向が見られる。さらに，この傾向は，“親しい人との関係へのダメージ

[11)] ネガティブ感情において，愛着スタイルによる違いが見られるのだろうか。この点を補足的に検討するために，12場面に対して，愛着スタイルを独立変数とする MANOVA を行った。その結果，愛着スタイルの主効果と愛着スタイルと場面の交互作用が有意であった（$F(3, 255)=6.05$, $p<.01$; $F(33, 2805)=1.65$, $p<.05$）。そこで，それぞれの場面に対して，UNIANOVA を行った結果，「2. 疲労」，「3. 能力不足」，「4. 親しい人から傷つくことを言われる」，「5. 親しい人とのケンカ」，「6. 親しい人から冷たい態度をとられた」，「8. 親しい人と離ればなれ」において，愛着スタイルの主効果が有意であった（Table 5 左側）。
さらに，Tukey の *HSD* 検定を行った結果（Table 5 左側），自己観がネガティブな愛着スタイル（とらわれ型や恐れ型）は，自己観がポジティブな愛着スタイル（安定型や拒絶型）に比べて，ネガティブ感情をより強く感じることが示された。なお，この知見は，今までに行われた多くの成人愛着研究（e.g., Mikulincer, Florian, & Weller, 1993）の結果と一致している。
さらに，「8. 親しい人と離ればなれ」では，とらわれ型は，他の愛着スタイル（安定型，拒絶型，恐れ型）に比べて，ネガティブ感情を有意に高く体験していた。このことは，とらわれ型が自他の近接性が損なわれることに対して警戒心過剰（hypervigilant, e.g., Mikulincer, Florian, & Tolmacz, 1990）であるためだと考えられる。

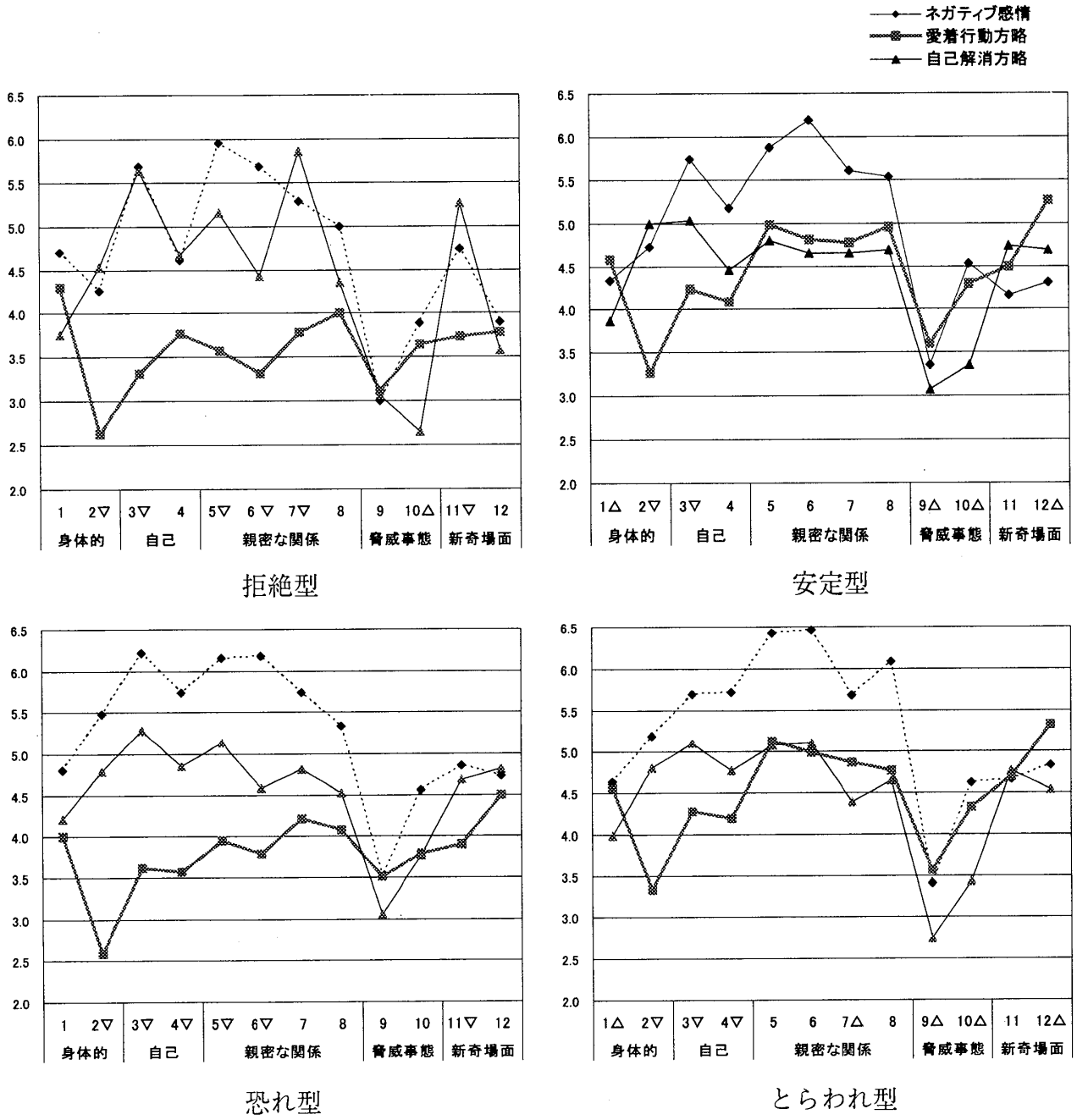

Fig.2　愛着スタイルそれぞれにおけるネガティブ感情，愛着行動方略，自己解消方略の比較[a)]

a) 場面番号の横の印は，*t* 検定を用いて，探索的に各場面で愛着行動方略と自己解消方略のどちらがより行われるのかを検討した結果を示している。具体的には，△は愛着行動方略の頻度の方が有意に高く，▽は自己解消方略の頻度の方が有意に高いことを示している（$p<.05$）。

（場面５～８）”や“新奇場面（場面11, 12）”においてより明確になる。

そこで以下では，これらのことを数量的に確認するために，まず愛着スタイルを独立変数として，多変量分散分析（MANOVA）を行う。次に，MANOVA において愛着スタイルの主効果や愛着スタイルと場面の交互作用が有意であれば，１変量の分散分析（UNIANOVA）をそれぞれの場面に対して行う。最後に，UNIANOVA において愛着スタイルの主効果が有意であれば多重比較（Tukey の *HSD* 検定）を行う。

12場面に対して，愛着スタイルを独立変数とする MANOVA を行った結果，愛着スタイルの主効果が有意

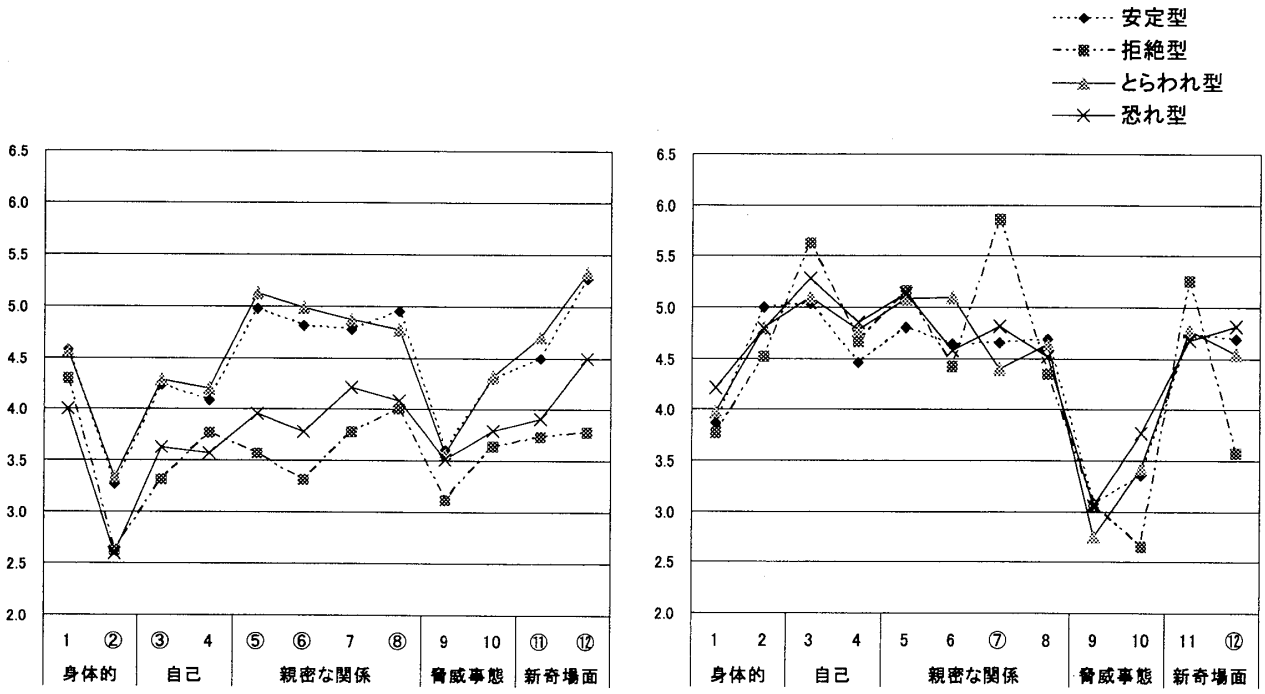

Fig.3 愛着行動方略，自己解消方略における4分類愛着スタイル間の比較[a)]

[a)] 場面の番号の○は，その場面において，UNIANOVAが有意でありかつ多重比較（Tukey の *HSD* 検定）の結果，愛着スタイルごとに違いがあったことを示す（詳細な結果については，Table 5 参照のこと）。

Table 5
Fig. 1 と 3 におけるUNIANOVA，多重比較（Tukey の *HSD* 検定，$p<.05$）の結果[a)]

場面カテゴリー	場面	ネガティブ感情		愛着行動		自己解消方略	
		UNIANOVA	多重比較	UNIANOVA	多重比較	UNIANOVA	多重比較
身体的	2	$F(3, 356)=5.25$**	Fear>Sec, Dis	$F(3, 356)=4.18$**	Sec,Pre>Fear	—	—
自己	3	$F(3, 364)=3.88$**	Fear>Sec, Pre	$F(3, 363)=4.27$**	Pre>Fear	—	—
	4	$F(3, 352)=5.93$**	Pre, Fear>Dis; Pre>Sec	—	—	—	—
親密な関係	5	$F(3, 353)=5.73$**	Pre>Sec	$F(3, 352)=11.03$**	Sec,Pre>Dis, Fear	—	—
	6	$F(3, 355)=4.69$**	Pre>Dis	$F(3, 355)=12.40$**	Sec,Pre>Dis, Fear	$F(3, 355)=3.05$*	—
	7	—	—	$F(3, 310)=3.34$*	—	$F(3, 310)=4.08$**	Dis>Sec, Pre
	8	$F(3, 340)=7.71$**	Pre>Sec, Dis, Fear	$F(3, 340)=4.21$**	Sec,Pre>Fear	—	—
新奇場面	11	—	—	$F(3, 365)=5.46$**	Pre>Fear	—	—
	12	—	—	$F(3, 355)=8.38$**	Sec, Pre>Dis, Fear	$F(3, 355)=3.01$*	Sec, Fear >Dis

[a)] UNIANOVAでは，愛着スタイルの主効果の検定を行った。そして，*$p<.05$，** $p<.01$である。また，安定型＝Sec，拒絶型＝Dis，とらわれ型＝Pre，恐れ型＝Fearと表記した。

であった（$F(3, 252)=10.76$, $p<.01$）。そこで，それぞれの場面に対してUNIANOVAを行った結果（Fig.3 左側，Table 5 中央），愛着スタイルの主効果が，「2. 疲労」，「3. 能力不足」，「5. 親しい人とのケンカ」，「6. 親しい人から冷たい態度をとられた」，「7. 失恋」，「8. 親しい人と離ればなれ」，「11. これから先のことを考える」，「12. 生活環境の変化」で有意であった（全て，$p<.01$）。

さらに，これらの場面について，多重比較（Tukey の

HSD 検定）を行った（Table 5 中央）。その結果，これら8場面中7場面では（「7. 失恋」以外では），安定型やとらわれ型が，拒絶型や恐れ型に比べて，愛着行動を一貫してより行うことが示された。また，このことにより，“親しい人との関係のダメージ”や“新奇場面”では，愛着スタイルによる愛着行動パターンの違いがより明確になるということが示唆されたと考えられる。

愛着スタイルによる自己解消方略の違い　では，自己解消方略において，愛着スタイルによる違いが見られるのだろうか。この点を明らかにするために，先程と同様の分析を行った。

12場面に対して，愛着スタイルを独立変数とするMANOVAを行った結果，愛着スタイルと場面の交互作用が有意であった（$F(33, 2772)=1.46, p<.05$）。そこで，それぞれの場面に対して，UNIANOVAを行った結果，「6. 親しい人から冷たい態度をとられた」，「7. 失恋」，「12. 生活環境の変化」において，愛着スタイルの主効果が有意であった（Table 5 右側）。

そこで多重比較を行った結果（Table 5 右側），拒絶型は，場面7では安定型やとらわれ型に比べて自己解消方略を行われており，逆に場面12では恐れ型に比べて自己解消方略を行っていないことが示された。

今までに，愛着行動を行いにくい拒絶型や恐れ型は当該の問題から距離をとる方略（Distancing coping, e.g., 全てを忘れようとする）を行いやすいことが示唆されている（Mikulincer, Florian, & Weller, 1993）。だが，この両者におけるコーピング方略の違いについては明らかになっていない。本研究では，「12. 生活環境の変化」において，恐れ型は拒絶型に比べて自己解消方略をより行うという違いがみられた。今後は，この点についてさらなる検討を行う必要があろう。

総合考察

研究1と研究2の結果を整理すると，以下のようになる。すなわち，(1)概して成人は，愛着場面において，愛着行動方略を自己解消方略と同程度あるいはそれ以下の頻度で行う傾向にある（Table 2，Fig.2）。だが，(2)安定型やとらわれ型は，拒絶型や恐れ型に比べて，愛着行動を場面によらず一貫して行いやすい（Fig.3左側）。(3)愛着スタイルによる愛着行動パターンの違いは，“親しい人との関係へのダメージ”や“新奇場面”においてより顕著になる（Table 3，Fig.3 左側）。そこで以下では，はじめに立てた2つの問いについてさらに考察を加える。

成人においても愛着スタイルによる愛着行動の状況間一貫性はあるのか

本研究の結果にもとづくならば，幼児だけでなく成人においても愛着スタイルによる愛着行動パターンの違いに状況間一貫性があると言えよう。このことにより，はじめに述べた「成人の愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを反映する」という暗黙の前提の妥当性は高められたと考えられる。

さらに研究1と研究2では，安定型やとらわれ型の結果のパターンは比較的類似していたが，恐れ型はこれらとは結果のパターンが異なっていた。すなわち，恐れ型は，安定型やとらわれ型と同様に，愛着行動をコーピング方略として持っている可能性が高いが（Table 2），これら2つの愛着スタイルとは異なり実際にはあまり愛着行動を行っていなかった（Table 3，Fig.3 左側）。このことは，恐れ型の「愛着欲求を持っているが実際には対人関係が崩壊することを恐れて愛着行動を行わない」という独自の特徴（Bartholomew & Horowitz, 1991）を示しているのではないだろうか。今後は，なぜ愛着行動をコーピング方略として持っていながら，実際には愛着行動を行わないのかについてより詳細な検討が必要であろう（e.g.，見捨てられ不安，抵抗，対人関係が崩れることへの恐れ，自信のなさ，など）。

また恐れ型の特徴を捉えることができたことにより，本研究で提唱した(1)成人が愛着行動方略をコーピング方略のレパートリーとして持っているかどうか，(2)実際に行うかどうかを区別して捉えることの重要性が示されたと言えよう。そのため，今後はこの区別を行うと同時にそれらにおける愛着スタイルの違いをより数量的に捉える手法を開発し，愛着行動における「成人であるが故」の特徴をさらに探索する必要があろう。

成人にとって愛着行動はネガティブ感情を解消する上でどういう意味があるのか

本研究により，成人の愛着行動の潜在性（i.e., レパートリーとしては持っているが，実際には行いにくい）が示された（Table 2, 3; Fig.3）。それでは，人が成人になってからも（頻度は減少するが）愛着行動方略を行うことにはどのような意味があるのだろうか。

一つの可能性としては，成人が愛着行動を行うことでしか（あるいは人を介したコーピングを行うことでしか）得られない何か（e.g.，安堵感，気持ちの整理のしやすさ，内省の手がかり）があるためだと考えられる。今後は，その何かに焦点を当てて分析を行うことで，愛着行動の成人での特殊性がより明らかになるのではないだろうか。

もう1つの可能性としては，発達の過程において愛着行動の役割・機能が質的に変化していることが考えられ

る。つまり，成人にとっては，ある特定場面でしか，自己解消方略に比べて愛着行動方略の方がネガティブ感情の低減には有効でないのかもしれない。とするならば，愛着行動の意味・役割・機能が生涯発達の中でどう変わっていくのかを理解することも重要であろう。というのは，そのことを理解することで，発達過程における愛着の意義がより明確になるからである。

今後の課題 本研究は，愛着スタイルによる愛着行動パターンの違いが，場面にかかわらず一貫していることを実証したはじめての研究として意義がある。だが，以下に挙げる点については，今後さらなる検討が必要であろう。

第1に，他者観がポジティブな群（安定型，とらわれ型）とネガティブな群（拒絶型，恐れ型）の愛着行動パターンの違いや恐れ型に特徴的な愛着行動パターンについては実証できたが，安定型，拒絶型，とらわれ型に独自の愛着行動パターンは明らかになっていない。

第2に，愛着行動方略と自己解消方略ではどちらがネガティブ感情の解消にとってより有効であるのかについては検討がなされていない。この検討を行うことは，人がなぜ成人になっても愛着行動方略を行うのかを探索する上で必要であろう。

引用文献

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.

Bowlby, J. 1969/1982 *Attachment and loss*. Vol.1. *Attachment*. NY: Basic Books.

Brennan, K. A., & Shaver, P. R. 1995 Dimensions of adult attachment, affect regulation, and romantic relationship functioning. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21,** 267-283.

Collins, N., & Feeney, B. C. 2000 A safe haven: An attachment theory perspective on support seeking and caregiving in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78,** 1053-1073.

Davila, J., & Sargent, E. 2003 The meaning of life (events) predicts changes in attachment security. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29,** 1383-1395.

Feeney, J. A. 1998 Adult attachment and relationship-centered anxiety: Responses to physical and emotional distancing. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. NY: The Guilford Press. Pp.189-218.

Fraley, R. C., & Shaver, P. R. 1998 Airport separations: A naturalistic study of adult attachment dynamics in separating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1198-1212.

Fraley, R. C., Davis, K. E., & Shaver, P. R. 1998 Dismissing-avoidance and the defensive organization of emotion, cognition, and behavior. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. NY: The Guilford Press. Pp.249-279.

Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.

加藤和生 1999 Bartholomewらの4分類成人愛着尺度（RQ）の日本語版の作成. 認知・体験過程研究, **7**, 41-50.

Mikulincer, M., Florian, V., & Tolmacz, R. 1990 Attachment styles and fear of personal death: Case study of affect regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 273-280.

Mikulincer, M., Florian, V., & Weller, A. 1993 Attachment styles, coping strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the Gulf War in Israel. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64,** 817-826.

中尾達馬・加藤和生 2001 成人の愛着行動とはどのようなものか？—女子大学生の自由記述の内容分析を通して—. 九州大学心理学研究, **2**, 99-106.

中尾達馬・加藤和生 2004a 愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの差異を本当に反映しているのだろうか？ 九州大学人間環境学研究院心理学教室（未公刊）.

中尾達馬・加藤和生 2004b “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.

Skinner, E. A., Edge, K., Altman, J., & Sherwood. H. 2003 Searching for the structure of coping: A review and critique of category systems for classifying ways of coping. *Psychological Bulletin*, **129,** 216-269.

Weiss, R. S., 1982 Attachment in Adult life. In C. M. Parkes & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *The place of attachment in human behavior*, NY: Basic Books. Pp.171-184.